

地域の課題を共有した、短期大学図書館と公共図書館との連携事業 －「POP・本の帯コンクール」の実践－

平 井 むつみ
(滋賀文教短期大学)

はじめに

本学は、滋賀県長浜市にある学生数 200 名弱の短期大学で、子ども学科と国文学科の 2 学科を有している。子ども学科では、保育士資格、幼稚園教諭・小学校教諭免許の取得を目指す学生が学び、国文学科には、司書資格を取得する課程が開講されている。

本学の図書館は、この 2 学科の学び・研究を支援する資料を中心に、学生の教養の涵養や楽しむための読書資料も意識的に収集してきた。そのため、従来は学科の学びのため以外の資料の利用も多かったが、ここ数年、学生の読書量の減少が目立つようになってきている。そこで、学生の読書活動推進のための方策の一つとして考えたのが、読書に関わるコンクールの実施であった。

一方、本学の所在地である長浜市の市立図書館は、活発な児童サービスを展開する図書館であり、小学校、中学校へのサービスも手厚くなされている。しかし、ヤングアダルトサービスの対象である高校生、そして大学生に対するサービスは、課題の一つとされていた¹⁾。

本学と長浜市の間には協力に関する包括連携協定が結ばれており、従来、司書課程の学生は、図書館見学、インターンシップ、ボランティア活動などで市立図書館にはお世話になり、また本学の教員も長浜市の図書館協議会委員、子ども読書活動推進会議の委員を務めてきた。

本稿で報告する「POP・本の帯コンクール」は、「若者の読書活動を推進する」という課題を共有し、地域連携活動の一環として、中学生から大学生までの世代を対象とした読書に関わるコンクールを本学と長浜市との共催で実施することを提案し、実現したものである。

1. 若者の読書の現状

本年（2018 年）2 月、全国大学生生活協同組合連合会は、第 53 回学生生活実態調査の結果を発表した。この調査に関して、新聞などでは、大学生の半数が「読書 1 日 0 時間」であることを見出しとして取りあげていた²⁾。それによると、2004 年に読書時間の項目がこの調査に入れられてから、1 日の読書時間が 0 である学生が初めて 50% を越えたということが記されている。確かにその通りではあるが、調査の報告書³⁾にある図表⁴⁾を見ると、「読書 1 日 0 時間」の学生は 2004 年から徐々に増加してきたのではなく、2004 年から 2012 年までは、30～40% の間を保っており、2012 年の 34.5% から 2017 年の 53.1% まで 5 年間で一気に上昇している。この状況に関して、浜島幸司は、「最近の大学生の高校までの読書習慣が全体的に下がっていることの影響が大きい」⁵⁾としている。

高校生の読書に関しては、「第 64 回学校読書調査報告」⁶⁾によると、調査月の前月一ヵ月間に 1 冊も本を読まなかったという「不読者」数は、1997 年の 69.8% を最高とし、その後減少したものの 2004 年～2018 年は、42.6%（2004 年）から 57.1%（2016 年）の間を行き来し、ここ 4 年間は 50% を越えている。一方、この調査によると中学生の「不読者」数は、2000 年以降急速に減少し、ここ十年ほどの間は、15% 前後を推移しているが、これは特に小・中学校において、2000 年以降急速に広まった「全校一斉読書活動」（いわゆる朝読）の時間に本を読むことによるものであると考えられる⁷⁾。文部科学省の「全国学力・学習状況調査報告書」⁸⁾によると、学校の授業時間以外に普段（月曜日から金曜日）、一日当たり

どれくらいの時間読書をするかという質問に対しては、32.7%が、「全くしない」とし、「10分より少ない」と合わせると46.2%となっている。また、「子供の読書活動の推進等に関する調査研究報告書」⁹⁾によると、「学校のない休みの日」(休日)にどれくらいの時間読書をするかという質問に対して、約4割が「全くしない」としている¹⁰⁾。これらのことから、中学生においても読書習慣が身につけているとはいいいがたい状況であると考えられる。

2. 本取り組みの目的と方策

当初この取り組みは、本学の学生を対象とし、その読書活動の推進を目的として考えたものであった。しかし、現在の中学生・高校生を含む若者の読書の状況を考えると、本学の学生にとどまらず、地域の中学生から大学生までの世代に対しての読書推進活動を展開していくことに、より大きな意義があると考えられた。そこで、長浜市立図書館に連携を呼びかけ、「長浜市に在住・通学をしている中学生・高校生・大学生・専門学校生」または「長浜市在住の15歳から22歳の方」を対象としたコンクールを実施することとした。

この取り組みでは、コンクールをきっかけにして読書をしようと呼びかけることだけを目的とするのではなく、応募された作品を広く紹介することで、地域のより多くの若者の読書意欲を喚起することを目的とした。それは、国の「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」(第四次)¹¹⁾にも、「子供の読書活動の推進等に関する調査研究報告書」¹²⁾を踏まえたうえで、「高校生の時期の子供は、友人等同世代の者から受ける影響が大きい傾向があることから、友人等からの働き掛けを伴う、子供同士で本を紹介するような取組の充実が有効であると考えられる」¹³⁾とあり、このことは中学生や大学生世代にとっても有効であると考えられるからである。

このような目的の達成のため、まずはコンクールにできるだけ多くの応募を得ることを目指して、参加賞と入賞者への賞品を用意し、応募作品の審査・入賞作品の発表後は、作品を本学図書館

や長浜市立図書館などで図書と共に展示をすることまでを、取り組みの内容とし、そのことは募集要項にも明記することとした。

募集する作品としては、本を紹介するPOP、本の帯、感想・書評文、感想画、本のカバー、葉などが考えられ、できれば、どれかに決めるのではなく、応募者が選択できる方式をとりたいと考えていた。自分に合った方法で本を紹介してもらえるようにすることで応募の関口を広げ、多くの人たちに本を読んで応募してもらいたいと考えたからである。しかし、一方で、作品を展示して、多くの人の読書意欲を喚起するには、視覚的にアピール度の高いものがよいという観点から、最終的にはPOPと本の帯に限定することとなった。

コンクールのタイトルは、本取り組みの目的から考えて、「本を紹介してみませんか」とし、「POP・本の帯コンクール」はサブタイトルとして付けることにした。

3. コンクールの実施

(1) 平成29年度

初年度、この取り組みは、必要経費を捻出するため、国文学科司書課程の教員でもある筆者が本学の「学長裁量経費」に応募することから始めた。先にも述べたように、当初は学内での取り組みとして気軽に実施することを考えていた。しかし、大学から地域連携事業として実施することの提案をうけ、その方向で実施するための検討を始めると、長浜市への共催申請や、長浜図書館との合意の形成、また広報など、「学長裁量経費」採択の連絡を受けた時点からでは、実施時期は冬休みを中心とした期間以外に選択の余地はなかった。募集開始は12月1日(金)とし、締め切りは1月10日(水)とした。締め切りは冬休みが明けた後もう少し余裕をみたかったが、学年末を控え、その後の予定から考えると、この日に設定するしかなかった。

ポスター、チラシは学内で制作し、本学及び長浜市立図書館6館で掲示・配布を行った。そのほか、市内の中学校、高等学校、専門学校、県内大学にも、コンクールへの参加の呼びかけとポスタ

一の掲示・チラシの配布を依頼することにし、中学校には、長浜市立図書館が庁内便で配布、高等学校、専門学校、県内大学には本学から郵送した。また、長浜市内の高等学校で学校司書として勤務する本学卒業生を通じて、湖北地域の高等学校の学校図書館にも直接配布してもらった。作品の受付場所は原則として本学図書館及び長浜市立図書館6館としたが、学校で受け付けてもらえる場合には、取りに行くことも可能であることを学校には通知した。

参加賞は予算の都合で、オープンキャンパス用



2017 年度 チラシ表面



2017 年度 チラシ裏面 (募集要項)

のグッズの中から文庫本サイズのブックカバーを選んで入試キャリア課に提供してもらい、賞品は図書カードとした。

受付開始後、この取り組みは、短大と公共図書館との連携の取り組みとして、京都新聞、中日新聞などでも紹介された¹⁴⁾。しかし、12月から1月にかけての期間は、学校の休業期間ではあっても、学年末を控えた本学の学生にとっては余裕がなく、また中・高生にとっても正月を挟んでの冬休みは短く、作品はなかなか集まらなかった。そのような中、夏休みの宿題として POP 作成に取り組みれた中学校から、まとまった数の応募を得ることができた¹⁵⁾。最終的な応募数は下記のとおりであった。

POP	中学生：32 点
	高校生：3 点
	大学生：6 点
	その他：2 点
	計 45 点
本の帯	中学生：1 点
	その他：1 点

審査会は2018年1月17日(水)に本学で行われた。長浜市からは、長浜市立図書館の館長2名と担当司書、本学からは副学長(審査委員長)、両学科長、図書館長、事務局長、司書が委員として出席した。「読んだ本の良さが伝わる作品」「POP や帯を見た人が読みたくなる作品」「著作権に抵触しない作品」を主たる審査基準として、最優秀賞1点、優秀賞4点、佳作5点を選出した。



2017 年度 審査会の様子



2017 年度 審査会の様子

結果の公表は本学のホームページ上で行い、賞状・賞品は受け付けた図書館で手渡すこととした。

受賞者の詳細は以下のとおりである。

最優秀賞 1 点 (POP／中学生)

優秀賞 4 点 (POP／中学生 1・高校生 1
・大学生 1)
(本の帯／その他 1)

佳作 5 点 (POP／中学生 4・大学生 1)

審査後の展示は、滋賀文教短期大学図書館、長浜市立長浜図書館、そして多くの応募のあった中学校の最寄りの図書館である長浜市立湖北図書館の 3 か所で 1 月 18 日から 3 月 31 日までの間行われた。入賞作品だけでなく全応募作品を図書と共に展示し、図書は貸出できるようにした。展示期間は、本学図書館では約 2 週間、長浜市立図書館 2 館ではそれぞれ約 1 か月間であった。本学での展示期間は学年末試験期間から春休みに入る期間と重なり、大きな動きは見られなかったが、その後の長浜市立図書館では、新聞にも取り上げられ¹⁶⁾、一定の成果が得られたようであった。



2017 年度 展示 滋賀文教短期大学図書館



2017 年度 展示 長浜市立長浜図書館

(2) 平成 30 年度

平成 29 年度は、国文学科の「学長裁量経費」による事業であったため、図書館が実務を行ったが、名目上は国文学科の事業となっていた。しかし、平成 30 年度には、この事業は大学の地域連携事業として予算化され、図書館が担当する事業として実施することとなった。そこで、本年度は 4 月当初より図書館として長浜市立図書館と連絡を取り合っており、計画を進めることができた。

前年度と異なるところは、昨年度の反省を踏まえ、開催時期は夏休みを挟んだ期間としたこと、ポスター、チラシの印刷を外注したこと、参加賞は本学図書館の公式キャラクター入りのクリアファイルを新たに作成したこと、また、長浜市立図書館の指摘により、応募資格に「長浜市在住・通学」だけでなく「在勤」も追加したことである。



2018 年度 チラシ表面



参加賞

図書館公式キャラクター入りクリアファイル

ポスター、チラシの配布先は昨年と同様としたが、本年度は長浜市内の書店 6 店舗に出向き、店内に、ポスターの掲示とチラシを置くことを依頼した。長浜市との共催事業であるということもあって、協力的な対応をしてもらえる店舗が多かった。また、本学卒業生の学校司書を通じての湖北地区の高等学校図書館への配布は、昨年よりも時間的余裕を持つてすることができた。

募集は 7 月 16 日（月）に開始したが、夏休み前には一切の動きはなかった。もともと、夏休み前は広報・周知期間と捉え、夏休みに制作してもらうことを期待していた。しかし、中学・高校の夏休みが終わる 9 月に入っても作品は集まらなかった。本学においても夏休み期間中に制作してきた学生はいなかった。

結局、今年度は中学校からのまとまった応募はなく、高等学校からは、本学卒業生の二人の学校司書の、学校図書館での生徒への呼びかけで、2 校から一定数の応募を得ることができた。本学においては、子ども学科の授業で取り組まれた作品の応募があり、また、司書課程を履修している学生は、授業の中での POP 作りの経験があるため、呼びかけに応じてくれた。

平成 30 年度の応募数は、以下のとおりである。

POP	中学生： 2 点
	高校生： 11 点
	大学生： 34 点
本の帯	高校生： 1 点
	大学生： 1 点
	計 49 点

審査会は 10 月 9 日（火）に本学で行い、本年度は、最優秀 1 点 優秀賞 4 点 佳作 8 点を選んだ。審査委員、審査基準、結果発表、賞状・賞品等は前年度と同様である。受賞者の詳細は以下のとおりである。

最優秀賞	1 点（POP／大学生）
優秀賞	4 点（POP／中学生 2・大学生 2）
佳作	8 点（POP／高校生 2・大学生 5） （本の帯／大学生 1）



2018 年度 審査会の様子

作品の展示は、本年度も応募全作品を図書とともに展示した。展示場所は 10 月 10 日（水）からまず本学で 2 週間、その後、長浜市立長浜図書館と長浜市立浅井図書館でそれぞれ約 1 か月間、年末まで展示の予定である。



2018 年度 展示 滋賀文教短期大学図書館



2018年度 展示 長浜市立長浜図書館

本年度は、本学と長浜市立図書館での展示の後、作品の応募があった高等学校の図書館でも展示することとなっている。このコンクールの目的から考えて、多くの人に見てもらえる、より多くの展示の機会があることはありがたいことである。

4. 課題

2回のコンクールを終え、最も大きな課題は、応募作品の数と開催時期であると考えている。

応募作品数に関しては、理想は個人の自主的な応募を多く得ることである。初回も今回もそれを目指して、広報に力を入れようとした。しかし、実際には、2回とも自主的な応募は非常に少なかったと言わざるを得ない。第1回目の中学校、2回目の本学の子ども学科の授業等、授業との関連での応募が多くを占め、また、長浜市立図書館、本学図書館、高等学校図書館のカウンターでの働きかけ、そして本学司書課程の学生への授業での呼びかけ等、周囲からの働きかけの中での応募がほとんどであった。

しかし、広報をすればそれを知って多くの自主的な応募がある、言い換えれば、若者がそれほど読書に関心を持っているのだとすれば、逆にこのコンクールの開催は必要がないのかもしれない。むしろ、このコンクール開催の意義は、このコンクールが、若者の周囲にいる年長者などが若者に読書をすすめることのきっかけとなることにあるのではないだろうか。そして、その中で若者に読書の楽しさを味わってもらうようにすることが大

切なのではないだろうか。そのように考えるとき、来年度からは、もっと積極的に学校の先生方、学校図書館等、若者に関わっておられる方々に働きかけ、連携を図っていく方策をたてる必要があると思われる。また、それこそが、地域連携事業として実施する意義でもあると考えている。

そして、その結果として多くの応募を得ることができれば、その後の作品と図書の展示も充実したものとなり、より多くの若者への読書意欲の喚起につながっていくことが期待できる。展示に関しても、本年度は本学図書館と長浜市立図書館のほか、市内の高等学校図書館での展示を予定しているが、今後、展示場所を増やすことの検討も必要であると考えている。

次に開催時期に関しては、コンクール後の展示の事を考えると、やはり夏休みを中心とした期間が適切であろうと思われる。中学・高校と大学の夏休み期間のずれなどを考えると、募集期間が大変長くなってしまふという課題が残るが、現状では来年度以降もこの時期の実施で検討せざるを得ない状況である。

おわりに

二年間のコンクールの実施を終えて、確かな手ごたえというものは、いまだ感じる事ができない。しかし、若者の活字離れ、読書離れを嘆いているだけでなく、そのための一歩を踏み出せたことは、本学の図書館としてはよかったと考えている。そして、地域の課題を共有して市立図書館と協働することができることも大変ありがたいことである。特に「若者の読書活動の推進」は、学校、地域などの連携が大切な課題であるとされている。今後この課題に関する取り組みを、様々な機関や人との連携を深めながら続けていければと願っているところである。

注

- 1) 平成26年3月に策定された長浜市子ども読書活動推進計画(第2次)「いのち輝く未来に向かって～つなごう子どもと本・のばそうけや

- きっ子～」においても「第3章2 地域における読書活動の推進（1）図書館」の【課題】の最初に「中高生の利用を促す工夫が必要です」が挙げられ、【今後の施策】のなかでも「中高生の利用を促すため、Y. A. コーナーの充実を図ります」とされている。
- 2) 中日新聞「大学生53% 読書1日0時間」2018. 2. 27 朝刊 毎日新聞「大学生の半数、読書ゼロ 1日平均は23分 生協連」2018. 2. 27 朝刊 等
 - 3) 『CAMPUS LIFE DATA 2017：第53回学生の消費生活に関する実態調査報告書』全国大学生生活協同組合連合会 2018
 - 4) 前掲書3) p15 【図表16】1日の読書時間分布
 - 5) 「第53回学生生活実態調査の概要報告」
<https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>
アクセス2018. 11. 3より
 - 6) 『学校図書館』全国学校図書館協議会 2018年11月号（通巻第817号）p16
全国学校図書館協議会が毎日新聞社と共同で毎年実施している調査
 - 7) 2年ごとに行われている文部科学省の「学校図書館の現状に関する調査」によると中学校の全校一斉の読書活動の実施率は、平成24年度88.2% 平成26年度88.3% 平成28年度88.5%となっている。
 - 8) 平成30年度報告書より。調査対象は中学3年生
 - 9) 平成28年度文部科学省委託調査。調査対象は小学4・5年生、中学1・2年生、高校（普通科）1・2年生。有効回答件数は小学校4・5年生あわせて5300件、中学1・2年生合わせて5749件、高校1・2年生あわせて4812件。
 - 10) 中学1年生37.3%、2年生40.1%。高校生は、1年生48.8%、2年生51.5%。
 - 11) 平成30年（2018年）4月策定
 - 12) 前掲9)
 - 13) 前掲11) p7
 - 14) 京都新聞2017. 12. 15 朝刊 中日新聞2017. 12. 19 朝刊
 - 15) 中学校の夏休みの宿題はA4サイズのPOPであったため、本コンクールの応募規定に合わせてB5サイズに書き直してくれた生徒さんの作品が応募された。
 - 16) 京都新聞 2018. 2. 23 朝刊